筑紫女学園大学・短期大学におけるCD－ROMを含むＡＶ資料の利用について

山　中　優　子

１．はじめに

図書館資料の中心が図書であった時代から、様々な形態の資料へと現在大きく変化してきている。本学でもＡＶ資料（CD－ROMを含む）の受入の増加、媒体の多様化は予想を越えたものがあった。ＡＶ資料が増えるにつれ受入・整理業務もさることながら、利用者サービスも変わらざるを得ない。

本学は同一キャンパス内に大学、短期大学が併設され、各々が小規模な図書館を持ちながら、運営する図書館事務組織は１つという特殊な形をとっている。学生は所属に関係なく、どちらの図書館も利用できるようになっている。このため資料の分散を最小限に押さえ、利用者の混乱を避けるよう努めている。またＡＶブースが大学図書館にしか設置されていない事もあり、たとえ短期大学図書予算で受入れても、電子出版物を除くＡＶ資料の全てを大学図書館に排架している。このように図書館が１つにまとまっていない事が、利用者サービスの大きなネックになっている。

２．ＡＶ資料（非図書形態資料）の受入の変遷

当初、まれに入ったＡＶ資料は、図書の付属資料として扱っていたが、次第にＡＶ資料単独のものが出回り始め、今までのやり方では管理できなくなってきた。

そこで、昭和51年から、まず財産扱いしない「購読料」としてスライド原簿に登録を始めた。当時の資料は主としてカセットテープとスライドが中心で、年にせいぜい10数点の受入であった。

ところが、昭和61年ごろから受入数が増加、また形態も多様化し、財産として扱うのが望ましいと思われる高額な資料が増えてきた。

そこで平成２年３月に、図書の付属資料や購読料ではない、「非図書形態資料」という費目を立てた。

これ以後、ＡＶ資料は、財産扱いする「非図書形態資料」「図書の付属資料」「購読ＡＶ資料」のいずれかで受入・整理している。

本学では、ＡＶ資料のための決まった予算枠がない。大学図書館の平成８年度非図書形態資料費は、購読料を除く図書費の18.5%を占めた。平成７年度が約16%であったので、やや増加している。短期大学図書館の場合、平成８年度はこれが5.5%、前年度が6.6%でほぼ横這いといったところである。

３．ＡＶ資料の整理・データベース化

整理は、「非図書形態資料」の場合、マイクロフィッシュ、ＣＤ、CD－ROM、ビデオといった資料の種類ごとに「非図書形態資料原簿」に記帳・押印し登録番号を与えている。NDC８版により主題に添って３ケタ分類し、これを請求記号としている。本学では、図書はいまだに目録カードを作成しているが、非図書についてはカードは作らず、市販のパソコンソフトを使ってデータファイル化している。

「図書の付属資料」については、図書原簿に付属資料と記帳し登録、７版により主題分類し、データファイルに読み込む。

「購読AV資料」の場合、パソコンの「購読AV台帳」に入力し、登録印を付している。非図書と同様に８版により３ケタで分類し、資料の種類別の記号と組み合わせたものを請求記号にしている。

データファイルは上記の３種類をまとめて一本化しており、それを事務用目録データファイルと閲覧用目録データファイルに分けている。利用者に提供する閲覧用には研究室に直接貸出されたものは出さず、返却された時点で読み込みをしている。「筑紫女学園大学・短期大学ＡＶ資料データベース」は、タイトルとメディア別で検索でき、双方の図書館に設置されているパソコンで検索が可能である。これは逐次更新され、またメディア毎にまとめたものは年1回プリントアウトし利用に供している。

４．ＡＶ資料の実態と利用促進の働きかけ

本学では、視聴覚機器のあるＡＶブース（５ブース）が大学図書館にしか設置されていない

ため、短大図書予算で購入しても、コンピューターソフト以外は大学図書館に排架せざるを得ない。

平成８年度末現在のＡＶ所蔵数（購読ＡＶについては研究室帯出分をのぞく）は大学～約1,250点、短期大学～約550点。

このうちCD－ROM、電子ブックなど３月末時点の電子出版物は、大学～35点、短期大学～52点の所蔵に過ぎなかった。しかしCD－ROMについては、この４月から急速に増加し、11月までに新規に50点程を受入れている。

学生のＡＶ資料の利用には、館外貸出とＡＶブースを利用する館内視聴とがあり、平成８年度のＡＶ資料の館外貸出は273点。数値としては大きくはないが、それでも５年前から較べると９倍の伸びで、一昨年からみても倍増している。これは貸出可能な承認済ビデオ・ＬＤの購入をすすめた事と、広報のためと考えられる。

ＡＶブースの利用件数も、平成４年の利用統計調査以来少しずつのび平成８年度は大学生・短期大学生合わせておよそ550人程であった。

ＡＶブースの利用ソフトの割合をみてみると、VHSビデオが平成６年度55％、７年度68.8％、８年度68％と過去３年間トップを占めている。次いでカセットテープだったのが、平成８年に初めてＬＤが入った。３位に６、７年度はＣＤ、８年度はカセットだった。ブース利用に際しては、ソフトの持込みも許可している。

ＡＶブースの利用に関しては、大学生と短期大学生が非常にアンバランスであり、過去３年間の統計では大学生が85％、90％、92％と高い水準なのに対して、短大生は僅か15％、10％、８％に過ぎない。学生数が倍近く多い短期大学生の利用が少ない理由として

①短期大学図書館にコンピューターソフト以外の非図書・ＡＶ資料がないため図書館にそういった資料があることへの認識が薄い。

②短期大学生は比較的カリキュラムがつまっているため、空き時間を使ってのブースでの視聴が難しい。

そこでまず資料の周知という点から、図書館で下記のような取り組みを行なった。

①本学の発行している学生向け定期刊行物「Campus Today」にＡＶ資料の紹介記事を掲載。

②図書館が貸出の際、延滞を防ぐ目的で渡している返却期限票（Ｂ６版）にＡＶ資料案内を記載する。

③短期大学図書館で、ＡＶ資料の写真パネル展示。

資料紹介として、学生の関心の高い実用英語検定・TOEIC・TOEFLなどの受験対策用資料と、語学関係資料の写真を撮って引伸し掲示。これは思ったより効果が高く、特に検定前には「あの写真に写っているカセットを借りたい」と大学図書館に来るようなった。

設備紹介としては、大学図書館に設置されているＡＶコーナーの紹介パネルを作成。（ブース・ビデオ架・ＬＤ架）

④短期大学図書館でのビデオ資料上映会。

全科に関連する仏教関係・語学関係などのビデオを上映。といっても短大図書館は閲覧室がワンフロアーのため、特に席を設けた訳でなく、音も近くの人にだけ聞こえるようごく小さく流し、掲示を出した。

⑤短期大学図書館では定期的に資料の展示を行なっているが、その時々のテーマに関連のあるＡＶ資料があれば、図書と共に展示する。

現在、「奏でる ― アジア音紀行 ―」と題し展示中だが、ＬＤ・ＣＤなどＡＶ資料の展示とともに、ビデオの放映も行なっている。

①②は、大学生・短期大学生双方に向けての働きかけであり、③④⑤についても、場所としては短期大学図書館での取り組みだが、大学生の短大図書館利用状況はかなり高いので、大学生への働きかけにもなっていると考えている。事実、これらの取り組みを行なってから、紹介した資料の利用件数が大学生短期大学生とも伸び、問い合わせも増加傾向にある。

次に映像資料については、出来得るかぎり日本図書館協会を通じて、貸出了承済ビデオ・ＬＤを購入するよう努めている。

５．CD－ROMの所蔵数の増加と学生の利用の変化

コンピューターソフトのなかでも、CD－ROMの伸びは予測を越えたものであった。当館に始めてCD－ROMが入ったのは、平成２年度短期大学の事。Ｊ－BISC、Ｎ－BISCを購入し、閲覧カウンターに出してはいたが、事務用

としての色合の強いものだった。大学図書館に至っては、平成7年から とかなり遅い受入だったが、今では調査・研究のためばかりではなく、楽しむためのCD－ROMも数多く入れている。

CD－ROMはキーワード検索にとてもすぐれており、冊子体と違って瞬時に回答が得られる事、またオンラインデータベースと違い、使用料が必要ないため、時間がかかっても自分が納得できるまで検索できるところが大きな利点と思われる。

パソコンは大学図書館に2台、短大図書館に4台設置しているが、事務用と兼用なのが悩みである。

平成8年後期からしか図書館設置のパソコン利用統計を取っていないため蓄積されたデータはないが、もっとも活用されていたのが、大学図書館では『新編国歌大観』、短大図書館は『戦後50年朝日新聞見出しデータベース』。特に『新編国歌大観』の利用度は群をぬいている。(CD－ROM以外のデータベース利用では、当館で作成している『筑紫女学園大学・短期大学所蔵文庫新書データベース』『同所蔵雑誌紀要データベース』もコンスタントに利用されている)

「平成8年度大学図書館実態調査」によると、視聴覚資料の所蔵数の推移として、マイクロフィルム・マイクロフィッシュ・レコードが過去5年間ほぼ横這い状態なのにたいして、ビデオテープ・ＣＤ・ＬＤが急速に増加し、CD－ROMも数値としてはまだ少ないが、年を追う毎に増加している様子が判る。平成9年度大学図書館司書主務者研修会（日本私立大学協会）で配布された「大学図書館の教育研究支援の充実に関する実態調査」集計結果をみても、CD－ROMを収集していると回答した館は177大学中143校ありこれは、ビデオ（VHS）の166校についで2番目の順位となっている。

当館では、これまでCD－ROMに関する利用者サービスとして、

①「ビデオ講座・図書館活用法」― 『図書館の達人5　データベース検索入門』と検索実習を組合せた講座 ― を年数回開いているが、その中で『Ｊ－BISC』や『雑誌記事索引』を取り上げ検索実習を行なっている。

②「図書館利用マニュアルシリーズ№6データベースを使ってみよう」などを作成。

③レファレンスを受けるつど個別に館員が利用のサービスを行なう。

しかし最近ではCD－ROMの数が急激に増え、館員も対応が追い付かなくなってきている。特に当館のようにサービスの専任がいるわけではない小規模館で、カウンターで1人、貸出業務をしつつ、レファレンスも受け、CD－ROMのサービスも同時に行なうのは難しい。

そこで、前から課題に挙がっていた学生向けのCD－ROMの使用マニュアルの作成を始めた。まず利用の多いものから始め、追い追い整備して調査・研究に役立つ主要なROMのマニュアルを作成する計画を立てている。現在CD－ROMマニュアルは4種類。『新編国歌大観』『雑誌記事索引』『戦後50年朝日新聞見出し～』と利用件数の上位3つまでのものと、『大宅壮一文庫雑誌記事索引』。(図書館利用マニュアルシリーズ№9、10、11、13) マニュアルでは最初にそのCD－ROMがどのような性質のものか説明し、次いで検索の方法という流れを採っている。

6．おわりに

ＡＶ資料は今後も増え続けてゆくと思われるが、様々な形態・内容を持つ資料を学生には上手に利用して欲しい、と願っている。そのためにより一層広報に務め、特に 「図書館活用法」のような講座は将来も継続して開き、多くの利用者にCD－ROMを始めとする、データベースに親しんでもらいたいと考えている。

年々新しい媒体が出てきて戸惑いもあるが、私達図書館員も自己研修を怠らず向上してゆきたい。